

# とうほうの風

～ やさしい心 丈夫なからだ みんな仲よく ひとりだち ～

令和7年(2025年) 10月1日 発行

## 「うんどうかい」がはじまるよお～！

～ がんばる力、あきらめない気持ち、ほめたたえる心 ～

【園長：田川隆司】

30℃以上の「真夏日」、35℃以上の「猛暑日」、ここまでは気象庁が定めている言葉です。最近は俗称としてマスコミでは「酷暑日」（基準は「猛暑日」と同じ）などの文字を連日目にするため、25℃以上の「夏日」は、もはや夏に使われる言葉とほど遠い感があります。とはいえ、やはり「お彼岸」を過ぎたところから少しずつ日射しの傾きも変わり、気温は徐々に下がり、朝夕は久しぶりに涼しく感じる風も吹くようになりました。夜も窓を開けたまま眠ることができる日になり、朝、幼稚園の前の花壇や植え込みからもかすかに秋の虫たちの声も聞こえてきます。

さて、いよいよ10月（神無月）を迎えました。過ごしやすい時季はすぐに過ぎ去り、今度は寒い…って言い出すのでしょうか。「四季」あるこの国で“感性”豊かに日常生活を楽しむには少しばかり、いや、とても厳しくなってきたように感じます。

東邦幼稚園では、リズム室を使い運動会の練習が始まりました。過ごしやすい日はがんばって園庭での練習も始まり、汗いっぱい姿が見られます。また、近くの「桜塚小学校」の校庭でも、連日「運動会」の練習が繰り広げられていて、様々なかけ声や音楽が聞こえてきます。公立学校で長く勤務した私にとって「運動会」「体育大会」は、子どもたちの「ハレの場」であってほしいと願っていました。しかし、運動が苦手な子、体力が伴わない子、そして、体が不自由な子にとっては、それこそ逃げ出したい日かもしれません。肢体不自由特別支援学校の校長をしていた時には、体の自由が利かない子どもたちを目の前にして、それぞれに応じた取り組みと支援を工夫しながら、子どもたち一人ひとりが、何かをやり遂げたという達成感から生まれるステキな「笑顔」になれるにはどうしたらいいのかを、職員全員で連日協議していたことを思い出します。



しかし、いつも根本には「誰のための体育大会？」というキーワードがあったのが事実です。

「誰のための体育大会？」ということは、いろいろな捉え方があっていいことですが、大切なことは、子どもたちが運動に親しむこと、体力を向上させていくこと、そうした活動の日ごろの成果を出す場、“節目”であると考えます。さらに加えるとすれば、運動会をはじめ、行事の意義のひとつとして、子どもたちが他の子たちと協力して活動しながら、行事をつくっていく過程に学びがあります。ふだんの活動でもそうした協働的な学びは行っているのですが、やはり、保護者に見えていただけ、とりわけ異年齢も交えて互いに見合う行事を通じた成長の機会は大きなものがあるでしょう。（ここに「あこがれ」という感情が生まれると…。）



子どもたちの“がんばる姿”を、あたたかい心のこもった「拍手」で称えてあげましょう！

## 「キッズフェスティバル」(育友会主催)に感謝♡

例年、育友会役員の皆様にたいへんお世話になっております「キッズフェスティバル」が今年も華やかに開催されました。(詳しくはInstagramで！)

神社などの“秋祭り”が各地で開催される中、保護者の皆さんのアイデアあふれる手作りによる親しみあふれるお祭りに、子どもたちの目も一層“輝き”を増していたようです。

人と人とがふれあい新しい何かが生まれる。大阪関西万博が日ごと各地のスタッフによるアイデアで盛り上がっている様子(特にインドネシア館)が報道されていましたが、日本の誇る“おもてなし”を含んだ大切なお祭り文化が、少しでも多くの人々に伝わって欲しいと願っています。

改めて「企画・制作・演出」等、ここまで携わっていただいた関係者に感謝申し上げます。





## “走る！” “跳ぶ！” “投げる！”

### ～「世界陸上“TOKYO 25”」～

今年度も半分が過ぎましたが、先月行われた「東京 2025 世界陸上競技選手権大会」は、スポンサーである TBS がいつも「世界陸上」と言うインパクトの強い名称で独占中継されていました。

振り返れば、コロナ禍で一年遅れ、しかも「無観客」で開催された東京オリンピック・パラリンピックでは、今ひとつ物足りなさを感じていました。今回の東京開催は34年ぶりという。しかも、あの「新国立競技場」で…。

私が初めて異動した学校では自身が専門とする部活動がなく、先輩教師から「いま陸上部が100人超してるから助けて！長距離メンバーの方が人数が少ないから任せるわ…！」と言われて顧問を始めた翌年。結局、先輩はすぐに異動してしまい、私一人で指導することになってしまいました。知り合いの高校の先生や後輩の陸上競技専門のバレーボール部顧問などに助言をもらいながら私なりに少しずつ工夫し慣れていった時、新しく入部してきた生徒が『ぼくは、箱根駅伝に出たいんです！』と宣言。『走ることが好きで続けられるなら、日頃の生活から自分自身の心も磨き続けなさい』と助言すると、登下校も毎日走り続けていました。するとすぐに全国2位の記録を出し、全国大会はもちろん、あの「ジュニアオリンピック」に出場することとなり、私も初めて旧「国立競技場」（当時は1963東京オリンピックが開催された「国立霞ヶ丘競技場陸上競技場」）のピッチに立ちました。サッカーやラグビーが好きだった私には、この“聖地”と呼ばれる場所で見える景色はまさに「壮観」の一言。自分の試合でもないのに、気持ちの高ぶりで「鳥肌がたつ」ことを初めて体験しました。

ちょうど今から34年前の“その年”に、ここ国立競技場であの「世界陸上」が日本で初めて行われ、男子走幅跳決勝では、カール・ルイス選手が当時の世界記録8m86を跳ぶ驚異的なパフォーマンスを見せた直後に、マイク・パウエル選手がそれを上回る8m95の大ジャンプを成功させ、1968年以来23年間破られなかった世界記録を更新しました。この8m95は、現在(2025年)に至るまで男子走幅跳世界記録として残り続けており、東京の地で生まれた伝説的記録と言われています。

また、女子マラソンでは山下佐知子選手が銀メダルに輝き、これが日本人選手初の世界陸上表彰台となりました。さらに男子マラソンでは谷口浩美選手(私と同年)が2時間14分台で堂々の優勝を飾り、日本人初の世界陸上金メダリストとなっています。

今回も男子棒高跳びで、スウェーデンのデュブランティス選手が6m30の世界記録を出したことは TV 視聴率にも現れており、日本の選手も次々に「ファイナリスト」と呼ばれる決勝進出者に贈られる誇らしい呼ばれ方をし、歴史に残るような素晴らしい“進化”を見せてくれました。

様々なアスリートが活躍し、楽しい夏でもあったことは、記憶に新しいところですし、MLB の大谷選手や山本選手など、他の多くの日本人アスリートが世界の大舞台で活躍する時代になったことへの感慨深さは皆さんもお感じになっておられるところでしょう。“聖地”と呼ばれることの意味合いもわかりますね。

どうか、これからの人生を楽しみに歩んでいく“未来ある子どもたち”には、心豊かな“感性”をもって笑顔で過ごせる国としての“聖地”にしたいですね。そう、大人としての「責任」をもって…。